

ともに輝き 未来を拓く子供の育成

～「個々の子供の学びに基づいた授業づくり」から「子供の心が動く授業づくり」へ～

相模原市立富士見小学校

校長 相馬 圭

1. はじめに

本校は、学習課題に対して最後までやり遂げようとする子供が多い。しかし、自ら進んで学習課題を見つけ出したり、解決に向けて進んで行動したりするのが苦手な様子が見られるということが、教育反省やアンケート結果の課題として挙げられていた。

以上のことから、本校では2020年度より、校内研究で扱う教科等を生活科・総合的な学習の時間とし、「ともに輝き 未来を拓く子供の育成」をテーマに、授業づくりの研究を進めてきた。サブテーマを、2023年度まで「個々の子供の学びに基づいた授業づくり」、2024年度からは「子供の心が動く授業づくり」とし、子供の思いや願いから「知りたい」「やってみたい」を引き出し、そこから生まれた課題を解決するために、子供が自ら探究的に学習できる授業づくりを目指している。

2. 研究概要

①研究テーマの捉え

「ともに輝き 未来を拓く」を次のように捉え、研究を進めている。

【研究テーマの捉え】

ともに輝き

【仲間と】

- ・よりよいものを生み出す
- ・成功や達成の喜びを味わう
- ・楽しいを作り出す

【地域と】

- ・つながれる
- ・課題が共有できる
- ・協力しあえる win-win-win

【互いの】

- ・意見を受け入れる
- ・違いを認め合う
- ・よさに気付く
- ・考えを高め合う

【子供も教師も】

- ・安心して表現できる
- ・挑戦して失敗できる
- ・いつでも相談できる
- ・材にのめりこんでいる

未来を拓く

自分から問題を見出す力
課題発見

日常生活に生かす
日常化・一般化

最適解を導き出す力
問題解決

周りを巻き込む
仲間づくり・共有化

②研究テーマに迫るための手立て

子供が探究的に学習を進めるため、次の4つの手立てをとっている。

(1) 思いや願いに沿った授業展開

日常生活や授業などでの子供のつぶやきや発言など

を大切にし、「もう一回調べてみたい」「次は〇〇しよう」などの思いや願いに沿った授業を展開するようにしている。さらに、単元の立ち上げ時には計画カリキュラムを作成しつつ、単元の進行に合わせてカリキュラムを柔軟に変更できるようにし、実施カリキュラムとして計画を練り直している。(探究の道筋づくり)

(2) 外部講師や地域教育力の活用

年度初めに、教師と地域の方との出会いを創り出す「マッチングイベント」を開催し、地域の企業や商店などに協力を依頼している。そこでの出会いを生かし、地域の材を学習材として活用することで、地域の課題となっていることを聞きたい時に話してもらえたり、詳しい方から何度も繰り返し話が聞けたりする。子供の思いや願いに沿って、力を貸してもらえる方に授業へ参加してもらうなど、地域教育力を最大限活用している。(探究の環境づくり)

(3) 振り返りと座席表による子供の思考把握

授業の終わりに、その日の学びを振り返る時間を設けている。それをもとに、子供の発言を想定したり授業の展開に見通しを持ったりするなど、授業づくりに生かしている。研究授業では、子供の振り返りを座席表に転記し、参観者が子供の思考を読み取ったり発言の背景について考えたりすることに活用している。(探究の見守り)

(4) 心が動く本物体験

学習材の価値に気付き、魅力を感じながら探究的な学習を進められるよう、充実した体験や活動ができるようにしている。ゲストティーチャーと存分に触れ合う時間や、学習材自体のよさを味わう時間などである。

また単元後半では、子供が本物としての表現活動を行うため、学習成果物を公共施設に展示することや、製作した物を販売することなど、社会の一員としての活動が行われている。(探究の原動力づくり)

3. 実践例

ここからは、2023年度6年3組の授業実践を用いて、研究の内容について述べていく。

①単元について

(1)単元名

さがみはランドへようこそ
～相模原 ちょっと好きになるプロジェクト～

(2)探究課題

「相模原市のシビックプライド※や街への愛情」について考え、それらを向上させたり深めたりする活動に取り組むことで見えてくる問題

※シビックプライドとは、都市に対する市民の誇りを指し、「この都市をより良い場所にするために自分自身関わっている」という当事者意識を伴う自負心

(3)子供の思いや願いと教材の価値

年度当初から相模原市のことが好きだと感じている子供は多かったが、自分の住む街と他市とを比べる経験がほとんどなかったり、比較すること自体が難しかったりする中で、何が好きか、どうして好きかを答えられる子供は少なかった。相模原市役所の観光・シティプロモーション課の方の話から、2回のシビックプライド調査の間、様々な取り組みによってランキングが多少上昇したことや、それでもまだ中位程度であることなどを知ったことで、「自分たちの手で、シビックプライドを上げたい」・「相模原が好きだと言える人を増やしたい」と強く感じている子供がとて多かった。街頭インタビューを行う中で、街の人にとって相模原市を好きな理由が少ないことや、好きだとしても即答ではなかったことなどから、街の人への働きかけもしていきたいという思いが強くなった。

本学級の子供は、ゲストティーチャーの話や話し合いを通し、シビックプライドを上げることも、相模原を好きだと答えられる人を増やすことが先ではないかという考えに至り、本単元の学習にたどり着いた。

相模原市は、読売広告社による、『シビックプライド調査2020』では、全国で78位であった。その前の調査ではほぼ最下位という結果になっており、街に対する愛着や誇りをもていない現状があると考えた。これまでの生活科・総合的な学習の時間で、自分が住んでいる街に対する愛着をもつことや、街に関わろうとする気持ちについて学んできた子供たちにとって、その本

質に迫れる学習材になるといえるのではないかと考えた。

(4)単元目標

相模原市のシビックプライド向上への取組を通して、相模原市への愛着とシビックプライドに関わる課題や、相模原市の魅力アップに関わる人たちの思いを知り、相模原市の魅力を広めるため、魅力がより伝わりやすく、より多くの人を巻き込める活動を考えるとともに、相模原市の一員として進んで行動しようとする。

②単元の展開

総合的な学習の時間における、探究のスパイラル(課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現)を意識した学習を次のように展開した。

(1)相模原市の魅力やシビックプライドについて考えよう(20時間)

これまでの総合的な学習の時間を振り返り、相模原の未来を考える中で、相模原のよさや課題について考えた。自分たちが住んでいる街を好きだという気持ちはあるが、相模原市では、街への愛着などについてどのように考えているのか調査したいという思いが生まれていった。

相模原市の現状について知るため、相模原市役所観光・シティプロモーション課の方を招いて、街への愛着などについてご講演いただいた。そこでは、シビックプライドに関する情報をはじめ、街への愛着がどのように生まれていくのかや、市としてどのような取組を行っているのか等、本単元を中心となる知識を得ることができた。また、2024年には相模原市が市制70周年を迎えることについても触れられていた。

さらに、「街の人は相模原市についてどのように考えているのだろう」という疑問が浮かび、街頭インタビューを行うことにした。そこでは、街の人が自分たちの住む街にどのような思いを持っているのか、どのようなものを街の魅力と捉えているのかなどを調査することができた。

集めた情報を基に話し合いを重ね、自分たちの手で、「シビックプライドを上げよう」「相模原市が好きになる人を増やそう」という、一年間の活動の方向性を決めていった。

(2)相模原市のことが好きな人を増やすためにできることを考えよう(10時間)

方向性が決まったところで、具体的な活動内容を決めるための話し合いを行った。しかし、子供がアイデアを出し合っても、これといった決め手がなく結論が出なかったため、相模原市でシビックプライド向上委員を務めるN氏をゲストティーチャーとして招き、民間の視点から相模原市のシビックプライドに関わる現状や活動内容について話を伺った。

N氏の講話やその後のディスカッションを通して、様々なアイデアが浮かび、相模原市のことが好きな人を増やすための活動には、どんなものがあるのか改めて検討し、相模原市のことが好きになれるテーマパークを作ることが決まった。

(3)さがみはランドへようこそ(15時間)

手作りのテーマパークがどんなものなのか、イメージを共有し、それぞれが相模原市の魅力だと感じている物を、それぞれが考えた方法で伝えるワークショップ形式のテーマパークを作る活動を始めた。

《各ブースの一覧》

- ・傘袋ロケット作り
(JAXA 相模原キャンパスから連想)
- ・さがみんの缶バッジ&しおり作り
(相模原市マスコットキャラクター)
- ・相模原市クイズ など

友達同士でアドバイスをし合いながら、作業を進めた。それぞれのブースの内容をよりよいものにしたいという考えから、単元初めにお世話になった相模原市役所 観光・シティプロモーション課の方にアドバイスを求める姿もあった。

各ブースの準備が進んだところで、他クラスの子供を対象に、プレオープンとして「さがみはランド」を開園し、体験してもらうこととした。そこで、体験した人から感想や意見をもらい、開園までの改善点とした。感想の中には「相模原の魅力を感じるには不十分だった」という厳しい意見もあり、改善に向け試行錯誤する姿が見られた。

【作業の様子】



実際に「さがみはランド」を開園したのは、休業日に行われたPTA主催の学校祭(ワイワイまつり)の中でのことである。「楽しく学べた」「体験が面白くて、またやりたくなった」などの前向きな感想をもらうことで、担当した子供は満足そうにしていた。

参加者からのアンケート結果を分析する中で、この活動で本当に「相模原市が好きな人を増やす」ことができたのか疑問に思う子供が、思いを打ち明けた。授業中の発言は次の通りである。

C1: 相模原のことが好きになるきっかけを作ってもらいたくてやることにしたけど、「お客様の声」だと、「絵を書くのが楽しかった」「簡単にロケットが作れることがわかった」など、あまり相模原のことを好きになるきっかけには思えなかったという感じがした。

C2: さがみはランドの目的って相模原を好きになってもらったり、好きになるきっかけにしたいって言ってたけど、その目的は感想を見る限り達成出来ていないのかな?と思った。

このような発言をきっかけにして、「相模原市が好きな人を増やす」目的を達成するためには、手段を変えたり目的を修正したりする必要があるかもしれないという考えに至った。当初の計画カリキュラムでは、対象を広げたり内容を改善したりして「さがみはランド」の活動を続けていくことにしていたが、子供の思いに合わせ、計画を変更していくことにした。

計画を変更した後の具体的な活動について迷った子供たちは、再びゲストティーチャーN氏を教室に呼び、アドバイスを求めた。これまでの学習で得られた知識から、「相模原市が好きな人」がその気持ちを普段から主張できるようにすることを目的とし、相模原市制70周年を記念したTシャツを製作・販売し着てもらう活動を行うことにした。

(4)さがみはランド Tシャツ製作所(15時間)

Tシャツ作りをすることが決まると、子供たちは、N氏から必要な作業についてアドバイスを受け、次の図のような部署・分担を作り、担当を決めていった。

それぞれの得意なことや興味関心のあるものを自分の分担としながらも、互いの取組を支え合い高め合うために協働する姿を狙い、作業を分担することにした。

